阿部次郎の留学日記

福田秀一

一

明治以来日本は、各方面の近代化を目指して先進国に学ぶべく、学芸面でも政府（文部省）が先頭に立って、多くの若い学者（その中には帝大教授予定者も少なくない）を欧米に送り出した。その人々の中に、風土も生活も人情も異なる異国での体験や感想を、日々の日記に綴ったり後日紀行・回想として記したりした例も多い。そこには時代を超えた日本人の目があると同時に、年代により筆者によって多少の相違はありながら、大袈裟に言えば近代化への目覚めや反省、具体的には先進諸国への驚嘆や感服・とまどいと日本がそれに追いつくことの必要、またそのための方策の片鱗、更に稀には行き過ぎた近代化への懐疑などを訴えた語が見えることもあって、かねて私はそれらに着目してきた。[1]

その中で、大正後期にヨーロッパに留学した阿部次郎と小宮豊隆との日記類は、内容が豊富で注目に値する。周知の通り二人（生年と大学卒業は阿部が一年上）は共に漱石門下で、阿部は哲学・美学、小宮は独文学を専攻して多くの著述や翻訳を有するばかりでなく、前者は「内面生活の（中略）記録」（自序）という「三太郎の日記」で文名を高めた他にいくつかの随筆集もあり、学生時代から俳句を余技として晩年（昭和十七～二十六年）は日記を「句日記」と題している位である。[2] 一方後者は師漱石の評伝の他、能・歌舞伎・芭蕉それに若い頃は新劇・邦楽・美術等の評論も手がけるなど、文壇にも幅広い足跡を残している上、『蓬里雨句集』[3]に付した恒子未亡人の「あとがき」によれば、中学時代に「俳句を作り始め」てから「八十二歳で死去するまで、折にふれ、ところに応じて」句作していたという。東北大学附属図書館には、「俳句手帳」と題するB7黒クロース表紙のノート一冊があり、それについて『東北大学記念資料蔵品目録 I　東北大学創立七五周年記念』（東北大学記念資料室・昭五八）には、「昭和二〇年一月記　と書きお

こし戦時中館長の任にあった教授の様々の構想や苦心がしるされている」（原文横書・算用数字）とある。しかも二人は留学の時期も重なっている（ただ、小宮の方が約一年後れてずれる）上、帰朝後は新設の東北帝大法文学部に同僚として勤めた（阿部が小宮を誘って推薦した）仲でもあり、その前後に催された『芭蕉俳句研究』（正・続・続々、岩波書店・大一一～一五、初め『潮音』に連載）や『芭蕉誹諧研究』（正・続・続々・新続、同・昭四～八、途中までは初め『思想』に連載）のメンバーでもあった。しかも阿部は前者の発起者太田水穂に語らわれて最初から参加、小宮は前者には第一冊分に途中から参加したが後者では中心的役割を勤めたらしく、刊行の際の代表者になっている。

ただ、二人の留学先には出入りがあり、重なっているのは大正十二年六月ベルリンでの一箇月だけで、その間に会ったのも数回（現在判明するのは二回）だけである。そしてそれぞれの留学日記類（具体的には後述）に記した見聞や感想には共通する話題や思考も少なくないが、それらを話題ごとにまとめて二人を並列・交互に扱うのは却って混乱を招くので、やはり二人について別々に述べ、対比は多く読者に委ねることにしたい。[4] 更に今回は、紙幅の都合もあり、阿部一人に絞って、それも一部の問題に限って考察する。

二

そこで阿部次郎の場合を取り上げる。[5]

彼の留学は大正十一年五月から翌十二年十月まで、留学先はフランス・ドイツ・イタリア・イギリスその他であった。詳しく言えば、大正十年十二月二十二日に[6]「文部省在外研究員として美学研究のため、満一年二ケ月間英独伊国への在留を命ぜられ」（これに先立ち十年三月東北帝大法文学部美学科担当の内報を受け、五月に受諾）、翌十一年五月七日（満三十八歳）東京の自宅を出発（「日記　大正十一年」による。注12参照）、「フランスのリヨン・パリを経てドイツに入り、ベルリンに滞在し、ハイデルベルクに移ってシュワルツ一家と深く交わる」が、翌十二年スイス・イタリー・エジプト・オーストリー・ドイツ・オランダ・ベルギー・フランス・イギリスなどを周遊」、九月「十一日にマルセーユから加茂丸に乗り、印度洋を経て」十月「十八日に帰朝し（注、神戸に、である）[7]二十日に帰京」した（この段落、特に断らない事項は『阿部次郎全集』〈以下『全集』と略称し、書簡は多く「書」と略してその番号で示す〉第十七巻の「年譜」[8]による）。

ところが、その期間の日記として現存するものは、日数としては多くない。すなわち、『全集』の言う「日記　大正十一年」（元日から几帳面に毎日つけている）に、出発の直前から五月九日に神戸を発って汽車で門司に着き一泊する（書四四九・四五〇により、翌十日に門司で日本郵船の箱根丸に乗船したことが判る）までの記事があるのと、大正十二年の六月末から十月初めまで、すなわち留学の末期から帰国の途中まで僅か五箇月余りの期間が「仏英日記」（以下、多く「仏」と略記する）として『全集』に収められているのとに過ぎない。しかも後者は、僅か数行ずつながら毎日欠かさずつけている前者とは対照的に、何日か

溜めてはその間の日々を(時に省かれた日もある)かなり長文で記していること、「まとめてつける事が多く、日を追って記述されてはいるが、日付はとびとびである」と田熊渭津子氏(『日記の目録――近代文学を中心とした――』、私家版・昭五七)が言う通りである。

しかしながら、ここに欠けている年月すなわち往路の船旅から二年目(大正十二年)の前半までの期間も、阿部は日記をつけていたのである。『秋窓記』(岩波書店・昭一二、『全集』第十巻所収)に収めた「羅馬日記の一節」(二年目の二月二十四日の記)は恐らくほとんどその日に宿でつけた形のままと思われるし[9]、更に確かには、例えば「仏英日記」(七月一日の条に記す六月十八日の記)に「〜のことは前の日記に略記した」とあり、また『游欧雑記　独逸之巻』[10](以下、単に「游欧雑記」もしくは「游」と略記する)に、

七月八日(中略)の日記に私はかう書いた――　(一、九年前)

十日は朝から家に籠つて、巴里以来たまつてゐた日記を書いた。(二、伯林の夏)

私は宿に帰つて、「(中略)」と日記に書いた。(同右)

などと記されている上、すでにその「自序」にこの書の「大部分は十年前の日記を改刪したもの」と明示していることによっても明らかである。書簡の一つ(四八〇、ハイデルベルクの下宿から東京の和辻哲郎宛、十月一日付)にも、

見に行つても(注、芝居を)直に人様に見せるやうなものを書くのはいやですから日記の中に書いてためて置くつもりです。日記は怠けながらも兎に角つけてゐますから最初の印象は其処に痕跡が残つてゐる訳です。

とある。

また阿部は、『全集』第十四巻(昭三七・一一)の「解説」に三女の大平千枝子氏が述べているところによれば、「日記、書翰、覚え書の類は公刊すべからず。特に日記や日録の類は何人の眼をも経ずして焼棄せらるべき遺志を茲に明言し置く」と遺言に書いているが、一方で没後に遺された日記は「整理に整理を重ねた上で保存されて」おり、「或年度のものを全く欠くのは、決して偶然な紛失ではなく、また怠慢のせいでもなく、意識的に破棄された結果と思われる」という(ほぼ同じことを大平氏は『全集』の「月報」第15号〈昭三八・四〉所載「父の日記を編集して」にも述べている)。

これによって考えれば、現在欠けている右期間の日記も、われわれには残念なことだが、大平氏の推測する通り阿部自身によって廃棄されたものとおぼしい。憶測すれば、往路の航海や最初のフランス滞在の部分を欠く理由は別として、ドイツ滞在の期間は次に表示するように右の『游欧雑記』に完全に覆われ、当時の日記に記した主要な体験と感想はそこに記してしまったとして(両者の内容・表現の距離については、後に考察する)、破棄したのではあるまいか。エジプト・イタリア旅行の部分も、それに近いかも知れない。

三

次に、彼の外遊中の行動を一覧しようと思うが、彼の場合、右の二つの手記・日記の他に家族や友人に宛てた書簡が多数残っており（『全集』第十六巻に、約一年半の外遊中のものとして九十余通が見える）、かなり詳しく追跡することが可能で、試みにそれを年譜風に作ってみたところ、掲出項目（日数）が七十余にもなった。その他に、茂吉の「遠遊」がウィーンでの二人の出会いを記録しており、[11] それらをそのままここに載せるのは煩に過ぎるので、以下には（一部前引の「年譜」と重なるが）阿部自身が記した「年譜草稿」（注8参照）の該当部分を、漢字の字体を改めて誤記と思われる文字のみ訂し、若干の注を付して引用する。

大正十一年（四十歳）

五月文部省在外研究員として渡欧の途につく。[12] 仏蘭西のリヨン、パリを経、独逸に入りてベルリンに滞留すること一ケ月、ハイデルベルクに移りて其処に落付く。シュワルツ家（注、下宿先、後文参照）と深交を締す。

大正十二年（四十一歳）

正月瑞西及び伊太利を経過して、ナポリより埃及に旅行す、同行木下杢太郎、児島喜久雄、小林古径、前田青邨、原善一郎夫婦その他の諸氏。二月ナポリに帰り羅馬、フィレンツェ等に各一ケ月滞留の後、ボロニア、ラヴェンナ、ヴェネチア、パドヴ、ミラノ等を経て瑞西のルツェルンに入り、墺太利のキーンより独逸のミュンヒェンに出でてリップス[13]先生の遺族を訪ひ、ハイデルベルクに旧友（注、シュワルツ家の人々）を見、ワイマールにゲーテ、シラーの遺跡を訪ひ、ニイチェ、アルヒイヴにて彼の妹と逢ひ、ドレスデン、ベルリン、オルデンブルク[14]を経て和蘭に入る。アムステルダム、ハーグに美術館を訪ひ、白耳義のブリュッセルを経て巴里の人となり、其間倫敦訪問に三週を費して、関東大震災後十日、マルセーユより帰国の途につく。十月廿日帰京。

これに、前記二つの手記・日記と書簡とから判明する年月日を加えて要約すれば、

1、出発からベルリン滞在まで　大正一一・五・7～　同・八・8
2、ハイデルベルクのシュワルツ家下宿　同一一・八・8～一二・一・4
3、スイス・イタリア・エジプト旅行　同一二・一・4～　同・六・1
4、二度目のドイツ　同一二・六・1～　同・七・3
5、オランダ～ロンドンの美術館見学と帰国の航海　同一二・七・3～　同・一〇・20

（1～4：游　5：仏）

の五期に区分することができる。「游欧雑記」は1の後半（ベルリン生活）から4までを内容とし（但し3の後半、イタリア・エジプト旅行の部分は省略）、「仏英日記」は4の後半から5の途中（マラッカ海峡）までを記している。

阿部の場合、在外研究の目的地に「英独伊国」という指定はあったようである（年譜類及び履歴書、恐らく出張命令にその旨記されていたのであろう）が、近年と違ってその行程や日程の割り振りなどの細目はかなり自由で、現地での状況・裁量にまかされていたらしく、右三国以外に、オランダ・ベルギーは通り道だから問題ないとしても、イタリアからは仲間とエジプトにも足を伸ばしている。なお、その帰途にはギリシアにも寄る計画であったが、彼地の「悪疫があつて行けぬことになつた」（書五〇一）のであった。

また、最初のベルリン到着直後（七月七日）には、「一二ケ月のうちにライン地方に転じようと思つてゐる」（書四六九、恒子夫人宛）とか「此処に一二ケ月ゐて又南の方へうつるつもりです」（書四七〇、姉の加藤ます宛）とか言っているが、実際には一箇月後（八月八日）にハイデルベルクへ移っており、あるいはまた、ハイデルベルクを引き払った二年目の正月六日、スイスからイタリアへ向かう途中ベルンの宿から夫人に「多分明日ルツェルンへ行つて明後日伊太利に入るだらう」（書四九七）と書き送っているが、実際にはこの時はルツェルンへは行かなかったようである（書四九八、同月九日夜、夫人宛）。更に帰国の航路も、夫人宛書簡（五一六、大一二・四・一六付）に「アメリカまはりはよして矢張印度洋を通つて帰ることにきめた」とあり、帰国後の講演「私の外遊中に与へられた問題」（大正十二年中か、於日本女子大、『全集』第十七巻所収）でも「帰りには米国を廻つて帰るつもりでありましたが面倒になつたのでまた印度洋を通つて帰りました」と言っていて、初めから決まっていたのではないようである。

そのように多少の弾力性はありながらも、彼の外遊（訪欧）には、一応設定された目的があった。すでに北住敏夫氏（注5所掲文献）なども言及しているが、そのことを彼は「游欧雑記」の第三章「山腹の家」の第二節に次のように述べている。

私は欧羅巴に出かけるときに、見学の一つの方針を立ててゐた。それは、その土地でなければ見られぬものを見、其処に住まなければ接し得ぬ生活に接することを主眼とすることである。この原則は、私の学問と興味との性質上、二つの方向に具体化する。その一つは、欧羅巴の美術館を出来るだけ叮嚀に歴訪することである。さうしてもう一つは、或国にゐるあひだ、許された時間の大半を一つの場所に落付いて、その国人の実際生活を味解することである。

右に見た在欧中の彼の行動は、この方針によく合っていたことが判る。すなわち彼は、続けて自ら言うように、「伊太利のやうな国」（オランダ・ベルギー・フランスなどもほぼ同様であったろう）では、その「語学の貧しさと、其処に見るべきものの夥しさとによつて、おのづから美術館の歴訪が主なる地位を占める」が、「独逸では、語学の関係から云つても、気質の親しさから云つても、後の方針を選ぶのがもっともふさはしいと」考え、それも「独逸人がまだ独逸人らしく生き、ルーターやゲーテ以来の伝統が猶その力を失はずにゐる場所」として、「ハイデルベルクに眼をつけ」（以上、右の「山腹の家」）、そこを「定住の地」（書四七五、太田貞一〈水穂〉宛）とさえ呼んだのであった。

四

留学中の阿部の観察・体験と感情・思索とを知る資料として、「仏英日記」は一応問題ないであろうが、「游欧雑記」はどの程度それを正確・忠実に写しているであろうか。その点を探るために、両者に共通する記事(時期としては二年目の大正十二年六月半ばから七月初め、事件としては後者の「十一、告別」すなわちオルデンブルク(注14及び後文参照)でシュワルツ一家と再会して別れるまでを)を二箇所対比してみる。その際、一方にのみ見える事実や表現の部分に傍線を施し、また記事としては対応するが記述の順序が異なる部分にはA・B・C等の記号を付した。これは(例1)にのみ存するが、例えばA～aの部分が「仏」と「游」とで位置を異にして内容的に対応するとの意味である。

(例1――どちらもその日の記事はまだ続くが、長くなるので途中で切る)

(仏1)

六月二十六日(火)　朝日[A]が照つたので宿の男が貴君は天気を持つて来て下すつたといつた。[a]正金[B]に行つて児島が紹介してくれた中村氏に逢ひ昨冬の分と四月の電報為替の分と四百余磅を信用状にする。Kunsthalle(注、語源的には芸術ホール／会館だが一般に美術館を言い、ハンブルクのはガイドブックに市立美術館とある)に行つて絵を見る。古い物は殆んど碌なものがないが新しいものにはいゝものがある。／CourbetやCorotが特におもしろかつた。中にもCourbetのPsycheの暗赤のTonが忘れられない印象を残した。一時又正金に行つて中村氏と食事を共にし其処で偶然に一高で寝室が一緒だつた平川工学士と一緒になる。殆んど二十年ぶりで此処で逢ふのも不思議である。[b]／四時近く漢堡発、[c]Bremen[D]でのりかへて去年の暮に通つた道を通つて七時過Oldenburg着。誰も迎に来てゐないのを不思議がりながら出口に来るとGerdaが飛んで来て握手する。Frau Schwartzを見はぐれたのだといふ。[d]例のやうに赤い血色のいゝ顔色にBlondの髪をかきあげたFrisurがよくうつる。市松の着物は去年僕がやつた浴衣を仕立なほしたものであるといふ。[e]荷物を届けるやうに云つておいて話しながら町を行くと[f]Frau Schwartzに行あふ、Bahnsteig(注、platform)をさがしたが見つからなかつたので帰るところだつたと云ふ。(後略)

(游1)

二十六日[c]の午後四時に近く、私はハンブルクからオルデンブルクに向ふ汽車の中に身を託して、ドレスデン以来の一週間の生活を回想した。伯林の五日は在留の諸友との往来に殆んど寧日がなかつた。伯林のG(注、阿部が前年七月、ハイデルベルクに移るまで下宿していた軍医未亡人の家の女中)は最早新バイロイト街の下宿から姿を消して、私の知人の前には消息をたつてゐた。私はたゞ彼女が堕落の巷に身をおとしてゐぬことを切望しながら心で永久の別れを告げた。ハンブルク[B]の一日は正金銀行と美術館とに暮れた。正金銀行で二十年前一高の寄宿寮で寝室を同じくしたH工学士に一高以来始めて逢つて、お互に此処で廻り合ふ不思議に驚いた。[b]さうして愈々独逸旅行の最後にオルデンブルクの諸友を訪はうとするのである。その日は珍らしく晴れた日であつた。朝起きると[A]日が照つてゐたので、宿の男は、貴君は天気を持つてきて下すつたと云つたが、[a]それが日暮になつても猶持ちこたへてゐた。[D]ブレーメンで乗替へて、昨年の暮

に通つた道を通りながら、私は半年の月日が彼等を如何に変へてゐるかを、恐れつゝも早く知りたかつた。七時過汽車がオルデンブルクの駅に辷り込んだとき、私は出迎の人達の喜びに輝いた顔を予期しつゝプラットフォームに降りたつたが、其処には誰の顔も見当らなかつた。不思議に思ひながら駅を出ようとするところに、思ひがけず女中のG（注、前出のGとは別人）が横合から飛び出して来て、いきなり私の手を握つた。老夫人と一緒に迎へに来たが、はぐれて一人になつたのだといふことである。[d] 私は荷物の配達を駅員に頼んで、二人で話しながら町を歩いた。[f] 彼女は去年に変らず親しげに嬉しげである。[E] 例の如く血色のいゝ顔色に、ブロンドの髪をかきあげた髪恰好（フリズール）がよくうつつた。彼女が着てゐる市松模様の上衣は、去年私が彼女に残して行つた浴衣である。あれを上衣に仕立てなほしました、と彼女は告げた。[e] こんな話をしながら歩いて行くところに、ひよつこり又老夫人に逢つた。プラットフォームを捜したが見当らなかつたので、今帰るところだつたといふ。（後略）

（例2――例1の記事から約一週間の後、七月三日の記の一部である）

（仏2）

（前略）Amerforst の前の停車場で一人の和蘭人が乗りこんで来て、隣の席が besetzt（注、英語の occupied に当る）かといふから Vielleicht（注、英語の perhaps に同じく、かつて「多分」と教えたが誤で、「ひょっとすると」の意）といふと、Vielleicht ですかと笑ひながらすわり込む。その席の英語を話す男が帰つて来ても、貴君の席でしたかと少しゐざつただけで平気なものである。／München から来る時 Stuttgart で Ordnung halber（注、「秩序のため」の意）に四人でなければならないと怒鳴つた Sieber（注、人名か）を想起して和蘭人は呑気な田舎者だと思ふ。Amerforst の乗換で赤帽がゐないので英語を話す男の一行が停車場の荷車をひいて来て運搬する序に僕のも一緒にのせてくれる。十時と云つてもまだ黄昏の、平原の中にある停車場に、チラホラゐる人の善ささうな和蘭人を見ながら汽車を待つのはのびやかな気持である。（後略）

（游2）

アマーフォルストの一つ手前の停車場で、一人の和蘭人が乗込んで来て私の隣の席が占領（ベゼツト）されてゐるかとたづねる。その席の人はさつきまでゐたのが見えなくなつてゐたのである。私はわからなかつたからたゞ多分（フイルライヒト）と答へた。さうすると彼は多分ですかと笑ひながら其処にすわり込んだ。さうして前の男が再び帰つて来ても、これは貴君の席でしたかと少しゐざつただけで平然としてつゐた。私はミュンヒェンからハイデルベルクへ行く汽車の中で「秩序のために」四人でなければいけないと怒鳴つた男のことを想ひ起して、和蘭人は呑気な田舎者だと思つた。さうしてアマーフォルストで乗換を待つとき、赤帽がゐないので、英語を話す和蘭人の一団が停車場の荷車をひつぱり出して来て、序に私のも一緒に運んで呉れるに及んで、私は益々和蘭人は呑気だといふ感を深めた。十時と云つてもまだ黄昏の、平原の中にある停車場にチラホラする、人の善ささうな和蘭人を見ながら、汽車を待つのはのびやかな心持である。（後略）

右二組の対比で判るように、「仏」は自身の記録・備忘として原語の綴りも登場人物名もそのまま記しているのに対して、「游」は読者を意識してそれらを訳語などに置き換えたりイニシャルにしたりした上、全体として多少とも読物的になっている。すなわち、読者に伝える必要のない情報（例えば「仏1」の最初の傍線部）やその章の主題からは

外れるKunsthalleの印象などを削り、代りに当時の自分の心境の説明や人物の動作の細かい描写（例えば「横合から」「ひよつこり」）を補っている。例えば例1に見るA・E・F各箇所の移動は、Aは「游1」でその直後の傍線部を生かすため、E・Fは状況をより解りやすくするための推敲と言えよう。

しかしながら、（例2）に見るように、そうした相違のほとんど無い部分もある。そこでは「仏」の原文が、最少限の修正を経てそのまま「游」に採用されている。両者の重複部分が少ないため、後者が全体としてどの程度原日記の姿を残しているかは不明と言う他ないが、記事の取捨や心境の吐露はともかく、そこに見える事実の記述には虚飾というほどのものは無いと見られ[15]、阿部の外遊日記としては、「仏英日記」のみならず「游欧雑記」（注10に述べた通り約十年後の筆で、中には時日を先取りした記述[16]もある）も、右のような条件を考慮した上で活用してよいと考える。阿部自身、「游」のことを後年「外遊日記の抄録」と言っている[17]。因みにこれはもちろん日記体ではなく、日付は必要に応じてしか記されていないが、前述の通り多数残る書簡によって推定できる日時が多く、全体として回想記の構成をとっており、河合栄治郎の「在欧通信」（もと『改造』連載）が日記と並行して書かれながら内容・構成に著しい相違を有するのとは、事情を異にする。

五

右の二つの日記類を通じて印象的なことはいくつかあるが、第一に挙げたいのはドイツとドイツ人への愛情、それらへの親近感である。特に戦後の疲弊に悩み、インフレ（マルクの下落）にあえぐドイツ人への同情、そしてその一因はドイツに過重な経済的負担を強いたベルサイユ条約にありとし、「この条約を強ひた聯合国の一員たる日本の臣民として、間接にその責任を負ふ」と、日本人としての一種の後ろめたささえ洩らしていることである。「游」の「一、九年前」はほとんどそのようなドイツの経済困窮の話題に終始し、「二、伯林の夏」にもそれは引き継がれて、後にはシュワルツ一家（後文参照）の家計に何らかの援助をしたり（年末一人でスイスのベルンへ往復したのは、明記していないがそのためらしい）、「十分の一税」（ここでは、外貨をマルクに両替したとき、その一割を喜捨する制度のようである）に進んで協力したりもしている。「仏」のパリ滞在中にも、

（前日に買ってきた「時局に関する本」の一つを読み）Versailles条約のこんなにひどいものなことを今まで知らずにゐたのは面目がない。（七・18。以下、大正十二年の月日をこのように略記する。なお、周知の通りドイツはその後二度も立ち直った）

Versailles条約の内容を今頃になつて知るのは恥かしいが独逸を永久に浮ばれないやうに十重二十重に縛らうとしてゐるのは卑怯であり、暴虐であり、非人道である。（後略、八・7）

などと記しており（以下、この節は特に断らぬ限り「仏」を引く）、書五三八（ロンドンのホテルからベルリンの小宮宛、この年八・18付）にも、七・18と同様な述懐に加えて「独逸人のうちに親しい友達を持つ

てゐるせいで特に独逸を気の毒に思つてゐる」と言っている。

ドイツとドイツ人への同情や親しみは折にふれて吐露され、

腹の底の善良で温かな独逸人が独りどうしてあんなに不幸でなければならないのかと考へると可哀さうになる。摂理の意味がわからない。刑罰と考へようとしても独逸人だけがこれに価するとはどうしても思へない、（後略、七・4、前日の記事）

とか、ロンドンで目にしたイギリスの貧民が「独逸人のやうな朴訥な善良さとは全く種類を異にして hard な smart な顔をしてゐる」（八・17）とか言っている。

それ故、もっと個人的なレベルでは、例えば

Baedeker は Holland und Belgium に変つて、今迄うしろの地図を見る為に始終出しておいた Thüringen の Baedeker が不要になつた。こんなにして独逸との縁がうすくなつて行く。（七・5、アムステルダムにて）

独逸語系のところにとまるのも今夜きりである。独逸語を出来るだけ封じて英語で通さなければならぬ用意が必要になつて来た。独逸語癖を Verlernen（注、「習ったのに忘れる」の意）する努力をするのは薄情であるが、敵意で一杯になつてゐる国を「旅人」として出来るだけ不愉快なく通過するためにはこれもやむを得ぬ Klugheit（注、賢明さ）である。（七・7、ハーグにて）

のような感傷や弁解が述べられ、パリ生活をふりかえっても、

Paris ではたゞ何となく日がたつた。独逸に較べれば気は軽いが独逸のやうに深く心に触れる生活もなかつた。（八・12冒頭部）

と言う。そして「これは言語が通ぜぬことも与つて力があるであらう」と、阿部が自ら言う通りに違いない。ドイツ哲学を専門とした彼が、ドイツ語を通じてドイツとドイツ人に親近感を持つのは、極めて自然なことである。

けれども彼は、英語も一通りはできたと思われるのに、イギリスとイギリス人にはあまり好感を持っていない。「ロンドンは大体においてきたない町である」（八・17）などは率直な観察で、その建築が「手堅いガツシリした」「野暮ではあるが Solid なところがそのとり柄である」（同）と美学者らしく客観的に評価している点もあるが、貧乏人をドイツ人と比べた感想のある前引の記事の前後にも、英国の資本家が内外で「金持でずるくて、見だしなみがよくて、沈着で、紳士顔をして、「自家防衛と自国の不利な状態を取繕ふしんねりむつつりな cleverness」であると、口を極めて罵っており、[18] 帰国の船上で見かけたイギリス人のふとした態度について、「英吉利人の御世辞は固より割引をしてきかなければならない」（一〇・2）はまあよいとしても、「英吉利人の身勝手を縮図にして見せられるやうで」（同）あったという感想もある。極め付きは「漢口で待つてゐる許嫁の男のところに結婚に行くといふ女と頭髪の真中に一群の白髪がある（中略）獅子鼻の醜い男と」の不倫（?）を観察して、

二人とも表面真面目らしくしてゐるところが英吉利人の偽善を代表する。淫蕩は今の欧羅巴一般であるが、口をぬぐふことの巧なものほど下等であるとすれば英吉利人の淫蕩は一番下等である。（同）

の評であろう。

このようにイギリスへの嫌悪はほとんど偏見に近いものがあるが、フランスについても前引のようにあまり親しみは感じていない。前に一部を引いたパリ生活最終日の記にも、

ただ女の夏衣裳のむき出しな艶めかしさにPersönlichkeit(=personality)の接触を欠いた刺戟を感ずるだけであつた。自分はまだ仏蘭西の生活を彼是する権利がない。それはもつと仏蘭西語を勉強してから再び来たときのことである。自分が今仏蘭西について云ひ得ることはその政策の非人道と愚劣とを兼ねてゐることだけである。これだけは敢ていふことが出来ると思ふ。(八・12冒頭部)

とある。

かうした欧米諸民族の日本に対する態度を比較し得る事態が、偶然に起こった。各紙に載った関東大震災の報道と論評である。阿部は九月二日の昼パリで、同地の新聞で知ったという坂崎坦[19]から聞いたのが第一報で、その後は予定していた美術館見物も止めて日本人仲間としきりに会い、情報を交換したり心配を分けあったりしている(九・30に帰国の船中で遡って記した日々の中に、二日のこととして記す)が、その続きとして「新聞の報道」についても

欧州の新聞を見るとFranceの同情が一番genuineな感じがした。英吉利の新聞は個人としての同情と国家としての嫉妬とを同時に感じさせるやうなところがあつた。Timesの寄書(注、投書のことか)には心の暖いものがあつたがDaily Mailの報道の調子は物珍らしい事件を報ずる冷さがあつた。Daily Mirrorといふ写真新聞には、歴史の進行が一朝にしてその途をかへ、第一等国が三流四流に落つるかも知れないなどと書いてあつた。併し英吉利流の腹黒さでこれを喜ぶ調子を表にあらはさなかつたが一日Chicago TribuneとNew York Heraldとを買つて僕はすつかり気を悪くした。其処には「Jap Death Tollが幾十万」といふやうな見出しがある。この地震で日本は少くともone generation後れると書いてある。世界中で最初に救助の為にstartしたのは米国だと書いてある。不慮の天災で競争国の出鼻を挫いたといふ喜び、米国のGloryを誇る心が日本の災害を悲む心の数等上に出てゐることが感ぜられた。何お前達の注文通りには行かないぞと思ふ心が自然に胸に湧いて来た。

という、もちろん限られた資料によってではあるが、興味深い比較と感想、そして阿部の理性的で自然な愛国心の発露が見える。

六

ドイツとドイツ人への親しみは、そこでの下宿先の人々との親交に細やかに記されている。むしろ読後の印象としては、特に「游」ではそれが一番強烈である。阿部のドイツでの下宿は二箇所で、最初の約一箇月はベルリンの新バイロイト街Neu Beyreuterstrasseの軍医未亡人Frau Siegfriedの許、その後の約八箇月は前述のSchwartz家であった。

初めの下宿は、「嘗て此家の下宿人であつた」(「游」の「二、伯林の夏」)友人H[20]が紹介・案内してくれたものであった。夫人宛の書簡(四六九)に

僕の今ゐるうちは軍医の未亡人で間貸しをして生活してゐるのださうだが金には困つても品は悪くない。男女の子供二人(注、「游」に「男の子は田舎に行つてゐて」とある)と女中と他に日本人の下宿人が僕と合せて今三人ゐる。ピヤノもあるし娘に音楽の教師もついてゐるし、部屋の道具などは勿論吾々の家とくらべものにならないほど立派だが、生活は随分きりつめてゐるやうに見える。

とあって、大体が知られる。

この下宿のことは「仏」にはほとんど出ないので、もっぱら「游」(二、伯林の夏)に記すところを信ずるしかないが、そこで阿部が親愛の情をもって多くの筆を割いているのは、「女中」(今風に言えばメイド)Gのことである。その点については北住氏(注5所掲文献)も指摘しているが、親しみのきっかけは、すでに愛する妻子があった彼も一人暮しの自然として若い女性に心が向いたものか、自然や美術とともに人間にも関心の深かった彼が最も身近な人物としての彼女に注意したものか、またその孤児の境遇に[21]多少の同情を覚えたのか、恐らくそのすべてであったろう。

阿部によれば彼女は「先づ美しい娘の部に属」し、「眼鼻立が整つて、言動の露骨な、西班牙風な(例へばカルメン風な)野卑にも拘らず、輪廓に貴族的な俤が残つてゐた」。彼の部屋で「何かの拍子に」"Deutschland, Deutschland, über alles"と「叫び出し」、「現在の独逸の逆境も結局この一句に基いてゐることを」信じていた彼がたしなめても承知せず、「い、え、Deutschland, Deutschland, über alles です」と再び叫んで、高笑いしながら部屋を飛び出して行くような女であった。また、「衣食に困らぬ程度の生活の安定を得たい」、そのために「金持(ライヒ)」な男と結婚したいということしか考えていない娘であった。

その彼女が次第に阿部に心を開いて行く過程は面白い。例えば、彼がいくらか加減を損ねて寝ていると、「矢張一人留守をしてゐた彼女がやつて来て、西洋流の礼儀におかまひなしに、床の前にある椅子に腰をかけて」身の上話や右のような希望を語り、「靴に穴があいたと云つて手にとつて見せ」たりする。それは「買つて貰ひたい謎に違ひないが、この場合その賤しさも憎む気にはなれなかつた」と、阿部は書く。更に、「金持で善良で、貴君のやうな人と結婚したい、併し貴君には許嫁があるでせう」とまで言う。それを彼は、「さもしいと云ふよりも寧ろほだされるところがある」とし、結論として「これは固より彼女の恋ではない。たゞ今の貧しさから脱れたさに満更冗談でもない空想を起してゐるのである」と分析するが、果してそれだけであろうか。阿部は「其処に留学生並みの誘惑を感ぜぬとは固より云ひきれない。併し女の貧に乗じてこれを弄ぶのは卑しいことで」、「この卑しさに陥ることを恥辱と感じた」彼は、「妙に domestisch-traurig-liebkosend-sinnlich(注、「家庭的な、悲しい、愛撫するやうな、肉感的な」と訳語を添える)気持に」なったと言う。

靴は結局その直後の日曜日に、「その無邪気な、貧しい姿が可哀さうになつて」買ってやる気になり、多めの代金を与えたところ、彼女は一方ならず喜び、いよいよ彼に親しみを見せる。彼を訪ねてきた友人

Hをやや無法に咎めたり、同宿の「何処かの国の大学教授（注、前引の夫人宛書簡によれば日本人ではあるまいか）」が本気で誘惑しようとしたと彼に訴えたり（彼は一応その教授を弁護する）し、やがて「毎晩寝る前にお休みを云ひに来る習慣に」なる。

その後も彼女とは、冗談半分の喧嘩をしたり仲直りをしたりしているが、やがて阿部は「伯林と彼女とから逃げ出さなければならな」くなる。その経緯は詳述を省くが、彼の語を借りれば、所詮「一外国人としての」彼は「持久的に彼女を飢餓（注、それは「欲望の緊張とそれが充されぬことから来る最も痙攣的な飢餓で」あった）から救ふ力を持つてゐなかつた」からだと言う。その過程で阿部は彼女を評して、一つの「方程式」（正しくは単なる等式である）を立てる。「彼女はミニオンとカチウシャとカルメン[22]とを加へて「野卑」で割つたものだ」というのである。そしてベルリンを一旦去る汽車に乗って、「到頭伯林から脱れ得たといふ、ほつとした気持が溢れてゐた」と言う。

ベルリン下宿時代の記事には、これらの他にもドイツの社会変動（「一、九年前」に「中産階級と知識階級との没落と漸衰に反比例して、労働者と大資本家とが共に勃興しつ、ある時代であつた」とある）とそのための結婚難（男子の絶対数不足と経済上の不安とによる）がもたらす性生活の混乱や「売笑婦の増加」とかドイツ人気質への褒貶（例えばバルコンに花を飾るとか公園の「誇大妄想的」「彫像」とか、あるいは東洋人への偏見やフランスへの憎しみとか）にやや注意されるものもあるが、主要な話題は以上のごとくである。

七

ハイデルベルクのシュワルツ一家とは、とりわけこまやかな親交を結んだ。その具体的な経緯についても北住氏前記論攷に要を得た考察があるが、ここも「前に此家に下宿してゐた」友人I[23]の紹介・案内で訪ね、即座に主婦と交渉が成立して（主人は数日旅行中）住み込むことになるのであるが、この家とその人々（家族と下女）のことは「游」の「三、山腹の家」以下の章に詳述されている（文中及び挿入写真の説明には「森の家」ともある）。すなわち、その家ではVilla Schlosspark（= Villa Castle Park　阿部は「古城園山荘」と訳している）と称していた（書四八八他）が、有名な古城のすぐ裏、ネカー河と新旧市街を見晴らす位置にあった。

主人は純朴でやや偏屈らしく、「人間社会に愛想をつかして出来るだけ狭められた範囲に閉篭つて生きて行かうとする」（五、誕生日の客）人で、「さほど酒にも強くない」（同）くせに酒好きで、結局はそれがもとで命を落す[24]のであるが、阿部を町の酒場へ誘ったり折々彼の部屋を叩いて雑談して行ったりするのであった。その妻は「もう鬢に白髪の見え始める年頃の、上品な小母さん」（三、山腹の家）で、「何時までたつても大人になりきれぬ部類の人に属するらしい若々しさを以て、軽快によく動き、人見知りせずによく語った」（同）という。要するに良い意味で明るく天真爛漫だったのであろう。「それに彼女は中々学者でもあ」り、「クーノー・フィッシャーやヰンデルバントの講義の聴講者

だつた」し、「東洋に対する特別の愛着を持つてゐて、小泉八雲先生の著書は大抵読んでゐるといふことであつた」（同）から、阿部には理想的な女主人（ヴィルティン）であったと言える。前の下宿人石原謙もその回想（注15参照）に、「殊に夫人は品位あり教養の豊かな如何にもドイツ婦人らしい人柄で」と書いている。二人の間には一男一女があったが息子は「飛行将校で二十二歳で戦死」、その姉は「大学を卒業して今弁護士の妻になつて」（書四七六）オルデンブルクにいるのであった。息子の婚約者は「とても他の男と結婚する気にはなれ」ず、「恋人の母を真実の母のやうに慕つて、今でも始終たづねて来る」という。嫁いだ娘には三歳近い女の子とその弟がいて、特に女の子の方は日本に残してきた二女M（美知子、以下子女の実名は年譜により補う）や三女C（千枝子）を思わせる。なお、三年前に満四歳余で病死した長男A（晃）のことを主人の死にふれて思い出す（彼のことを思い出すこと自体は夫人宛書簡四六七〈六・21リヨンから〉・四八六〈一一・16この家から〉にも見える）ところは感動的で、また跡取りの次男K（敬吾、阿部の渡航約一箇月半前に生まれる）の写真をめぐる母子二人の夫人とのやりとり（「六、老友の死」、阿部がそれを「机の抽斗にしまつて置いて、時々それを取出して眺めるのに満足してゐた」のを二人は「それではあまり可哀想」だと言った）も、ほほえましい中に日本人と西洋人との愛情表現の違いを見せている。[25]

娘の家には「頬の赤い、丸顔の、無邪気な、娘らしさそのものと云ふやうな眼をした十七八の女中」（「三、山腹の家」、名は前引の「仏1」などからゲルダと判る）が居て、阿部の入居当時たまたまその一家が来ていたため知り合ったが、一旦オルデンブルクに戻っていた娘とその二児が主人の入院後母に呼び寄せられたときにも、ついて来た。多分に子守役でもあったのであろう。自然に阿部は、シュワーベン訛を持つ（八、旅立を前に）純朴な彼女へも関心を抱き、「日本流に云つて今年漸く十七であるが、柔らかに胸の張つた大柄の体が日毎にふくらみを増す蕾のやうに処女さびて来てゐた」（六、老友の死）との観察を記している。その観察と描写は、翌年六月末、ドイツ生活最後の名残としてオルデンブルクにこの一家（未亡人になった母も来ていた）を訪ねた（その往路の一部を、さきに「例1」として示した）際にはかなり大胆になり、

（前略）Konrad（注、前述の弟）が散らした名刺を集めようとして彼女がしやがんだのを何気なく見ると衣物の奥に彼女の乳がみえる。胸の張つて来たことは停車場で逢つた時から気がついたが薔薇色をした円い小山のやうに綺麗にふくらんだ乳のいたゞきに丸で黒味を帯びぬ鮮紅の乳首が可哀らしくついて両方の乳の間に同じく薔薇色をしながら稍白味の勝つた凹みが小川のやうに流れてゐるのが何とも云へず美しかつた。Tizian の Venus の最上乗のものさへこれほど美しい胸は持つてゐないやうに思はれた。……（ママ）（仏、六・29）

と記すに至っている。

翌日にも「ゲルダが子供部屋で子供達の着がへをさせてゐるところで一緒に暫く遊びながら又彼女の不用心な乳を geniessen（= enjoy）し

た」とあり、このあたりが、遺言で日記の公表を禁じた一つの理由かも知れないが、まだハイデルベルクに居た時期から阿部は「頭の辷りすぎぬ、のろつこい彼女とポツリ〳〵と何気ない話をするのが毎朝の楽み」（七、亡きあと）になり、彼女の方も「この間帰省したとき、貴君の召使になつて日本へ行きたいと親達に話して見たが、あまり遠いといふので許されませんでした」（八、旅立を前に）と言うに至る。彼女との関係はこの後も彼女の信頼を得つつ、「彼女を妹のやうに可愛がつてやりたい」（同）と記す以上には発展しないのであるが、老夫人から彼女が挑発的に見えるかという意味の質問を受けた阿部は、そのことも契機になって、「異性の美と善とに対する感覚」と信実・貞実ならびに「結婚とは」というようなことを考えて記している（同）。因みに、「仏」（七・1）には、シュワルツ夫人及びその知人と四人の会話が「誘惑」の「問題に落ち」、「処女の自衛力」と「若い女が夜一人で歩くこと」の可否から「貞操」の重視などを論じた後、彼は一人自室に戻って、異性愛と友情とを許容する社会的慣習が西洋と日本とで逆である旨を指摘し、それを「如何にすべきか」と自問した記事がある。

八

オルデンブルクでのゲルダとその朋輩クリスティネとについての観察と記述はまだある（六・21には「彼女等の寝室が丁度隣にあるのは多少心のときめきを誘はぬでもないがそれも極めて微弱である」とあり、七・4にはしみじみとした別れの場面がある）が、長くなるので話題を転じて、阿部の人間観察に移る。

何事にも観察が細かく、かつそれを日記に克明に記録するのが、阿部の性向だったようで、旅先で見た現地人などについて、例えば次のように書いている。

Naumburg（注、ライプチヒとイエナの間）で同じ車室に乗り合した書店員の娘とLeipzigからDresdenの間でPlaster（注、Pflasterの誤記か。恐らく膏薬類）を売りに来た女のことは前の日記（注、公表されていない）に略記した。娘が（注、阿部のことを）哲学研究のDr.だと知つて口を抑へた態度とそれから靴や白い衣物のよごれを申訳し始めた女らしさが面白かつた。（後略、六・18）

此町（注、アムステルダム）で著しく目につくのは自転車の多いことである。（中略）それが絡繹たること巴里のEtoileの自動車以上である。男は普通のもの、女は股のわれぬものに乗ること他の国と同様であるが若い女がこれほど多く自転車に乗つて歩くのは他で嘗て見ぬところである。友達らしいのが二人で（時としては三人で）臂に手をかけながら輪をならべて話して行く。風で上衣がまくれて下の白いレースが出るのを気にしながらなほして行くのもある。女が男の臂に手をかけながら並んで輪を走らせて行くのもある。（中略、「此処の女が独逸よりも美しく見える」ことを一言）それから髪が黒く顔が浅黒く鼻のモロリと盛上つたJudin（注、ユダヤ人女性）は既に汽車の中でも目についたが今日町を通つて眼についた。Spinozaの国にJude（注、ユダヤ人）が多いのは歴史から云つても不思議はないが、此処では土着の人らしく特殊人種らしくないやうに歩き廻つてゐる。（以下、広場のベンチに腰かける老人や戯れる子供、そして噴水に着目している）。（七・4）

「若い男女の自転車乗り」が多いことや「Spinoza の国」に「Jude の血が古くからまじつてゐるのであらう」こと、もう一度「街を通る自転車の少女が裾のまくれるのを気にしてこれをなほしながら行く」こと（最後の点は「日本の風情である」が、洋服で「二つの腿の間に自然の体に近い凹みが出来るのは日本の着物とは別様のなまめかしさ」だとある）[26]は二日後にも説かれ、その間に

暗くなつてもあかりをつけぬ自転車が多い此町の人は一体に黄昏の光をたのしむらしく公園にもガス燈が極めて少ない。Koffie（注、喫茶店）も薄暗いまゝに外に椅子を出して客をもてなしてゐる。まして樹かげには恋の囁きが多い。（七・6）

とか

一体に此国の女の色の白さは雪国の女の色の白さ――越後女のぽつちやりとした色の白さである。併しGesichtszüe（注、顔立ち）は細面の面長が割合に多く独逸人の親類といふには余りに華奢に見える。（同）

とか書かれている。観察の細かさと描写の精しさ、そしてそれを旅先で書きつけた体力と根気に敬服する。

注

（1）これまでに私は、それを私流に定義する「文人学者」に絞って、以下のような稿を発表してきた。

「文人学者の留学日記　明治篇一――漱石・鴎外・矢一の往路の場合――」（国際基督教大学『アジア文化研究』一九、一九九三・三）

「同　明治篇二――漱石・鴎外・矢一の現地滞在と帰路の場合――」（同大学『人文科学研究』二五、一九九三・五）

「同　明治篇三――島村抱月の「渡英滞英日記」――」（同　二六、一九九四・六）

「同　明治篇四――永井荷風の「西遊日誌抄」と「西遊日誌稿」の一面――」（前記『アジア文化研究』二〇、一九九四・三）

「青邨の観察と表現――『伯林留学日記』に見る」（『俳句研究』一九九三・一～四）

（2）俳人としての阿部については村山古郷「阿部次郎の俳句」（『俳句』昭五一・四）があり、「大正十一年欧州に渡り、秋ハイデルベルクで作った句」（注、一三句、その大部分は九鬼周造氏夫人の「紀念帖」に請われたものとして、恒子夫人宛の書簡四八八に記されている）を「著しく練達の円熟味が加わっている」と評している。

（3）昭和五九年・岩波ブックセンター信山社製作。恒子未亡人が豊隆の「七周忌の記念に」、彼が「折にふれ、ところに応じて作った句を、およそ年代順に配列」して刊行したもの。三五〇余句を収める。

（4）なお、木下杢太郎も右の二人と終生親交があり、斎藤茂吉もそれに次ぐ親しさと言ってよく、彼らもヨーロッパ留学中一時行動を共にしたり（杢太郎と阿部らの大正十二年一～二月のイタリア・エジプト旅行）会ったり（茂吉と阿部はウィーンで〈後文参照〉、小宮はミュンヘンとベルリンで）しているが、全体の行程が異なる（杢太郎は初めアメリカへ渡ってキューバも訪れ、ヨーロッパではスペイン・ポルトガルへも行っている）上、その「欧米日記」の成立過程には若干の問題もあるし、茂吉の記録は猶更日記ではない（歌集「遠遊」「遍歴」と手帳）ので、考察は他日に譲る。

（5）以下に述べることの一部もしくはごく要点は、新開岳雄『光と影　ある阿部次郎伝』（昭四四・三省堂ブックス、「影と声（副題同じ）」として一九八五・深夜叢書社より再刊）の「十一　転換」～「十二　日本・ヨーロッパ」や北住敏夫『阿部次郎と斎藤茂吉　上』（桜楓社、一九八四）の「第三篇　三、阿部のヨーロッパ留学――『游欧雑記独逸の巻』その他――」及び「四、茂吉のヨーロッパ留学――『遠遊』『遍歴』滞欧随筆――」（初発

表は「阿部次郎と斎藤茂吉のヨーロッパ体験」と題して『山形女子短大紀要』第13集〈昭五六・三〉にも説かれている。特に北住氏の論は精しく、視点や考察に本稿と重なるところが少なくない。

（6）この時、阿部次郎数え年三十九歳（八月生まれなので満三十八歳）。古川久氏編の「年譜」（『全集』第十七巻所収）によれば、大正二年度以来慶応義塾大学文科美学科の講師を勤め、同六年（履歴書には五年とあるが、自作の各年譜（注8参照）に六年とあり、日記によっても確かめられる）～十年度は日本女子大学校で「文学原理論」をも講じていたという。

（7）そのことは『全集』第十六巻所収書簡五三九・五四二からも推測されるが、石原謙『学究生活の思い出』（石原謙博士文集刊行会・昭三四、その大部分を「Ⅰ回想」として『石原謙著作集第十一巻　回想・評伝・小論』に再録）の「第一部（著作集にはこの三字なし）学究生活五十年」の「Ⅲ新しい門出」によって確認される。

（8）この「年譜」は『全集』編集委員の一人古川久氏が、「年譜遺稿」（改造社『現代日本文学全集第二十篇　上田敏・厨川白村・阿部次郎集』所載、昭和四年まで）、「年譜ノート」（大正五年まで、やや簡略）、「年譜草稿」（昭和四年まで、「年譜遺稿」より詳しい面あり、その草稿か）、「履歴書」などに拠り、日記・書簡などから必要事項を補ったとあるが、当面の年月に関する限り、「年譜」は阿部自身の手に成る「年譜遺稿」や「年譜草稿」に比して大きな出入りは無い。

（9）なお、『秋窓記』でその前後に位置する「埃及訪古記」「カイロ附近」「テーベの古都」「アレッツォの一夜」「四月のフィレンツェ」の五篇も現存の日記に欠けている部分の見聞・体験を記したものである。参考までにそれらを文中に見える日付によって順に並べて示せば、

埃及訪古記	大正一一・六・12～13（往路の船旅の途中） 一二・一・18～19
カイロ附近	18～30
テーベの古都	30～二・2
羅馬日記の一節	二・24
アレッツォの一夜	四・5
四月のフィレンツェ	6～五・7

のごとくで、特に短い「羅馬日記の一節」の他は回想記であり、かつ次に述べる『游欧雑記』と違って断片的なので、今は取り上げない。

（10）改造社、昭和八年二月刊。元来「昭和六年の夏からこれを書き出し」、「昭和七年の殆んど全年を通じて」書き続け（自序）、『改造』（昭六・一〇～七・一二）に断続的に連載した一一篇に、他の新聞・雑誌に発表した三篇を「附録」として加えたもの。今、右の初版によった。なお、『全集』第七巻（送仮名を増し、副詞などの漢字を仮名に改めたものが多い）の他『昭和文学全集25阿部次郎　小宮豊隆　木下杢太郎集』（やや難読の漢字にルビを付す）に収められ、また附録の最後「ルツェルンの春」は『現代日本文学大系40魚住折蘆〔他〕集』に、仮名遣を改めルビを加えて、収められている。

（11）そのことは、佐藤佐太郎氏の『茂吉解説』に収めた「斎藤茂吉と阿部次郎」（初発表は『短歌』昭三五・二）や藤岡武雄『ヨーロッパの斎藤茂吉』（有斐閣選書、昭五六）の末尾「茂吉のヨーロッパの足跡」にもふれられている。

（12）当初は重病の義兄（姉の夫）加藤氏を見舞った後神戸から恐らく八日に乗船の予定であった（書四四六）が、加藤氏が「つひ先程死んだといふところに行合せ」（書四四九）、通夜などに参加して「跡始末の相談の為其処から乗り損つて到頭門司から（注、十日に）乗船することに」（同前）なったのである。

（13）Theodor Lipps. 内外の人名辞書類にも見える著名な哲学者であるが、阿部は彼に私淑し、その *Die ethischen Grundfragen*（第二版）を訳した『倫理学の根本問題』（哲学叢書第六編、岩波書店・大六、『美学』と併せて『全集』第三巻に収めたものは、若干の漢字を仮名に改めあるいはルビを付したり索引を省くなど、多少の改変があり、今は右の初版による）の凡例には、

リップスは千八百五十一年に生れて千九百十四年（一昨年）に死んだ。独逸に於ける一二の大学に教職を奉じたあとで、千八百九十四年から千九百十三年までミュンヒェン大学の教授を勤めてゐた。

とあるばかりでなく、続けて

若し同時代の先輩中自分が最も多く思想上の感化を受けた人を「師」

と呼ぶものとすれば、リップスは正しく自分の哲学上の「師」である。（傍点原文）

と言っている。また「游」（九、二度目の独逸）には、

私は欧羅巴に来る最初から、名士を歴訪しようなどといふ希望は全然持つてゐなかつた。併し日本をたつときから是非これだけは果したいといふ二つの訪問計画は始終私の心にあつた。一つはミュンヒェンでリップスの遺族をたづねること、もう一つはワイマールでニイチェの妹を訪問することである。私が思想的に恩恵を被つた欧羅巴人は極めて多数であるが、その家族がまだ残つてゐるもの、その遺族をたづねて死後の感謝を致す義務がある者は、この二人であることを私は感じてゐたのである。（同前、後略）

とある。

（14）ブレーメンの西方約五〇キロ、「北海の近く」（書四九三）で、シュワルツ氏の娘が嫁いでいる。

（15）そのことは、阿部がベルリンからハイデルベルクに着いた当日や翌日の行動を記した「三、山腹の家」の冒頭数頁と、既にハイデルベルクに留学していてその折阿部らを迎えた石原謙の回想「ハイデルベルクの「山腹の家」」（『全集』の「月報」第9号、昭三六・七）とを比較しても言える。

（16）例えば、ベルリン到着直後（大正十一年）の七月八日の記事（一、九年前）の中に、「これは三四ケ月後のことであるが、ハイデルベルクに行つてから」というような記述がある。

（17）河合栄治郎編『学生と科学』（日本評論社『学生叢書』第七巻・昭一四）に寄せた「研究生活の内的障礙」（『全集』第十巻所収）において。

（18）ほぼ同じ感想が書五三八（ロンドンのホテルからベルリンの小宮宛、この年八・18付）にも述べられ、「長くゐても他の多くの人達のやうに英吉利好きになれさうにもない、美術館のいゝのがせめてもの楽みだがそれを見てしまつたら早く巴里に帰りたい」とある他、「仏」（九・2冒頭部）には、ロンドンでは「（注、パリと比べて）気忙しなくて日記を書くことも出来なかつた」のは、美術館見物の他に図書購入の事務（別稿参照）もあって

多少従前よりも忙しかつたせいもあらうが原因の七分はHotelの部屋が薄きたなくて其処で何かをする気分にさせなかつたこととLondonの町と風土とが自分の性に合はなかつたことに帰着するであらう。

London には二十日ばかりゐたが遂に馴染めなかつた。Luzern や München には六日位ゐたに過ぎないが其処を去るときにはもつとひかされる心が多かつたのに。

という、かなり客観的な反省も見える。

（19）さかざき・しずか。高名な美術史家であるが、明治四三年早大英文科卒、大正二年朝日新聞入社、文芸・美術担当記者となり、一〇～一二年欧米留学、パリの世界美術史会議に児島喜久雄とともに出席、晩年のモネをその自宅に訪ねる。帰国後は早大に出講（西洋美術史）、やがて同文学部教授（以上は主として『日本近代文学大事典』による）。

（20）注15に挙げた石原の回想によれば、「一高時代からの旧友林久男」。独文学者で大正十一年から三年間英・独に留学、旧制七高・二高・三高教授を歴任（『日本近代文学大事典』による）。

（21）「游」の「二、伯林の夏」に「彼女は伊太利人を父とし、英吉利人を母として生れ、七つの年母に死別し父に捨てられて、伯林の孤児院で育てられた不幸な孤児であつた」とある。

（22）もちろん阿部は、これらのヒロインの出る小説を原語もしくは英訳・独訳で読んでいたであろう（ゲーテの「遍歴時代」は、この直後のハイデルベルク生活における毎日の読書対象であったし、後年『ゲーテ全集』でも「ファウスト」とともに翻訳を担当している）が、一方で「復活」は大正三年、「カルメン」は同七年に芸術座によって上演され、劇中歌が流行したことでも有名である。「ミニヨン」の歌劇の初演はそれより後れる（完全上演は同十年帝劇、露国大歌劇団、浅草オペラとしては同十三年、ミカゲ歌劇団）ようである（大田黒元雄『歌劇大辞典』及び増井敬二『日本のオペラ――明治から大正へ――』など）が、ヒロインの歌う「君よ知るや南の国」（今歌われるのは堀内敬三の訳詞）は、ゲーテの原作からの鴎外訳がすでに知られていた。

（23）前記の石原謙である。その回想『学究生活の思い出』（注7参照）にも阿部の名は出るが、ハイデルベルクでの交友とこの下宿とのことは、注15に挙げた「ハイデルベルクの「山腹の家」」に詳しい。

また「游」でこのときIすなわち石原やY（ベルリン大使官員矢野正

雄、一高で阿部らの一年上)と共に散歩した「伯林に本拠を置くS」というのは、右の石原の「山腹の家」によると吹田順助で、「これも一高時代に同級であつた」という。阿部・石原・吹田といった後年の碩学が若き日に異国で出会う場面は、想像するだけで胸を躍らせるものがある。因みに吹田の「ハイデルベルクより」(『思想』大一一・一一、『旅人の夜の歌――自伝――』〈講談社・昭四三〉一〇に再録)は、彼が東大独文科を出てすぐ赴任した札幌農科大学で同僚となって以後親交を持った有島武郎宛の書簡の体裁をとっているが、新来の阿部をその下宿に訪ねたことにも言及している。

(24) それは阿部の下宿中で、新学期の聴講手続を進めていた頃のことであった。胃痛を覚え盲腸炎との診断で入院したが、それは誤診で、「胃に腫物が出来て穴があいて」おり(腫瘍による胃穿孔か)、手術して経過は良好と見えたが、ついに悪化して亡くなった(「游」の「六、老友の死」、書四八六)。死の二日前、阿部に川魚を食べさせたいと思って「水中に飛び込んだ夢を見た」話は、病院に彼を見舞わなかったこととともに、阿部をいつまでも悲しませ後悔させた。『游欧雑記』の冒頭には、「亡友コンラート・シュワルツ氏に捧ぐ」とドイツ語で記されている。なおこの川魚はフォレレつまり鱒の一種で、この話は「游」の附録の一篇「フォレレを喰つた話」にも語られている。

またこの一家のことは、和辻哲郎宛に同封した照子夫人への書簡(書四八四、この年十一月十四日付)にも、

私の下宿は恐らく独逸でも一番立派な家庭の一つで、此処にゐる九鬼君などは独逸に来てから僕のうちの妻君位上品な人を見たことがないと云つてゐますが、兎に角此処で独逸人の生活を見ることが出来たのは幸ひでした。併し元気だつた主人が一週間ばかり入院したあとで三四日前に死んで昨日葬式がすんだばかりなので、その「上品な夫人」も新しく後家さんになつて甚だ気の毒です。一人息子は戦死して今ハンブルク近所のオルデンブルクといふところに嫁に行つてゐる娘一人しか残つてゐないのですからこれからどうして行くだらうと心配してゐます。この夫婦のことでは色々面白い話がありますがそれは帰つてからでも話さなければ長すぎて書いてゐるわけに行きません。主人も大変な善良な人で夫婦ともすつかり僕と仲よしの日本ずきになつてゐたのに甚だ残念でした。主人は南独逸の善良さを代表するやうな人でした。

と詳しく伝えられている。

因みに、阿部の帰国後大正十三年に渡欧した安倍能成は、『我が生ひ立ち――自叙伝――』(岩波書店・昭四一、そのVの「滞欧一年半のこと」)によれば、同十三もしくは十四年にしばらくこの家に下宿していたが、「事情があつて」他へ移ったという

(25) ついでながら、夫人宛書簡(五二八、オルデンブルクから六・30付)には、

此処にゐてこの家の夫婦の子供の育て方を見ると日本では親の手をかけることが必要以上に多すぎるやうな気がする、(中略)此処の子供は母親が一月位離れてゐても女中と大人しく留守をすることが出来る、(中略)夜ねる時は姉弟だけで別室にねて、床に入る時は女中が暫くついてゐるだけである、それにも拘らず母子の情愛の深さは決して吾々に劣らないやうに見える、女が結婚して母となつた後でも本を読んだり自分の修養をつゞけたりすることが出来るためにはどうしてもこういふ育て方を考へなければならないと思ふ、固よりこれは家の建て方や食事の仕方や生活法の全体と連関した問題だが、それだけに将来日本の女の発展にとつて重大な関係を持つ問題だからそれ〴〵の家庭で研究して見るに値する興味のある問題であると思ふ、(後略)

という、当時としては大変に進んだ考え方が述べられている。

(26) ついでに、七・20には、あるレストランで昼食時に「淫売らしい女が英吉利人らしい老人の客と食事をしてゐた」のを見たことを記して、

西洋の女の乳をemphasizeする衣物は乳の大きい西洋の女にあつては特に刺戟的である。それに両乳と水落との凸凹がわかれるところまで露出する抜衣紋、時として腋毛が見えるまで短い袖、足の肌がすいてよく見えるうすい靴足袋！西洋の女の着物はその肉体を売物に出してゐる露店のやうなものである。さうして此の如き衣裳の流行に男を刺戟する目的が隠されてゐないとは誰が云ひ得よう。自分が女なら気恥かしくてこんな着物はとても着てゐられないだらう。日本の女はこんな衣物の真似をすべきではない。

とあり、ここでも彼の観察の精しさと好み（阿部にとってはそれ以上の重大な問題であった）とが知られる。

付記

一、資料・文献の調査と確認に際しては、各地の図書館・文学館の他、畏友片野達郎氏と東北大学助手で同大学附属図書館調査研究室研究員の大原理恵さんや角川書店の山口守義氏にお世話になった点がある。記して御礼申し上げる。

二、本稿は「阿部次郎と小宮豊隆――その留学日記について――」と題する報告の前半の一部である。紙幅の都合で割愛した阿部の日本美術その他の日本文化に関する省察や彼地での留学生たちとの交際、また小宮の留学生活等については、本稿と前後して出る見込の続稿（本学『人文科学研究　キリスト教と文化』28所載）に取り上げる予定である。